

『自分スタイルの地域参画 〜生き抜く力を発揮して〜』

愛媛県男女共同参画センター 係長 門田 欣也



★私が感じる、女性の力

近年、「女子力」という言葉をよく耳にするので、どういうことを意味するのか調べてみました。その使い方から、女性に対する社会的要求や理想などジェンダーバイア



ス（性別役割に関する固定的観念など）の強いものだということはわかったのですが、これといった明確な定義は見つかりませんでした。2009年の新語・流行語として登場したのですが、巷で使われているうちにその使い方や解釈などに広がりが出てきているようです。

では、皆さんは女子力と聞いて何を一番に思い浮かべますか。

年齢や性別などによってイメージは異なるかもしれませんが、経験上私が一番に思いついたのは、女性の「直感力と行動力」でした。もちろんそれらは女性特有のものではありませんし、女性は皆そうだと決めつけているわけでもありません。

自分の意志を貫きNPO法人を設立した女性。経済的自立を目指し起業した女性。地域の活性化を目指し様々なボランティアに取り組んでいる女性。脱サラし、自分のやりたいことを追求し続けている女性。仕事上、私がこれまでに知り合ったこれらの女性たちの多くが、直感力と行動力という点で共通していると感じたからです。

直感で動くなんていい加減で思慮が浅いと思われるかもしれませんが、この直感が

意外にまともで、しかも根拠が漠然としていないにもかかわらず、自分に間違いはないと確信していて、その時々勢いで一気に行動に移しているのです。

組織運営や経営戦略となると不慣れな面を露呈してしまうこともありませんが、その活動内容が地域に密着したものであればあるほど、あるいは自己実現への思いが強ければ強いほど、必ずフォローしてくれる仲間が現れ、困難を克服した後は以前よりも活動に自信と広がりを見せているのです。

いずれにせよ、自己実現を目指す女性の直感力と行動力には目を見張るものがあります。

★女性の生き方が多様化した時代

近年、育児や家事に積極的に関わる男性を「イクメン」「カジメン」と称し、育児雑誌などで目にするのが多くなりました。家事や育児参加に関する男性へのアプローチは、80年代後半頃から全国各地で数多く行われてきました。当時、足立区女性総合センターで行われた男性改造講座は、そのネーミングもさることながら「女性問題は

男性問題」を基点に展開されるテーマや講師陣はとても新鮮で、たいへん興味深いものでした。また、関西を中心に広がったメンス・リーブの「男の鎧を脱ぐ」というフレーズも当時はよく使われていました。

仕事人間ではなく、家庭や地域とのバランスのとれた生き方を男性に問いかけ始めた80年代は、女性の新時代の幕開けと言われ、自立に目覚めた若い女性たちが多様な生き方を創造してきた時代でした。

日本経済が好景気であった80年代は、女性を取り巻く環境が目まぐるしく変化します。日本はアメリカのウーマン・リップ運動の煽りを受け、それまで当たり前とされていた女性の生き方（結婚し家庭に入り家事・育児に専念する）に疑問を持つ女性が増え



始めました。若い世代の女性には、結婚よりも仕事に重点を置くキャリア志向が芽生え、精神的・経済的な自立を求める人も多くなってきました。

85年に男女雇用機会均等法が成立し、女性には追い風になると思われていました。が、実際には、男性社会の中で男性と同じような働き方を強いられたいえに家庭と仕事の両立を求められるなど、働く女性たちにとって大変厳しい結果となりました。

とはいえ、80年代を生き抜いた若い世代の女性たちは、それまでの女性の生き方に一石を投じ、自分らしさという新しいカテゴリーの中で多様な生き方を創造していったのです。

実践力から生き抜く力へ

90年代に入り、バブル崩壊後の経済不況に加え、急速に進む少子・高齢化、老後の社会保障など将来への不安感が社会に蔓延してきたころ、それらを解消するキーワードとして男女共同参画に注目が注がれるようになります。99年には男女共同参画社会の形成は21世紀の日本の最重要課題の一つに位置づけられました。



2000年代に入り、市民の学習ニーズにも徐々に変化が見られてきます。それまで主流だったジェンダー論や女性学を用いた意識啓発に、アサーショントレーニングやカウンセリングなどといった方法論が加わり、以降、市民のニーズにも後押しされ、様々な実践的ノウハウを取り入れた講座やセミナーに人気が集まるようになりました。

現在、愛媛県男女共同参画センターで実施しているリーダー養成セミナーは、職場や地域などでリーダー的な役割を担っている人やこれからリーダーを目指す人が主な対象ですが、コーチングやファシリテーションなど多くの手法を取り入れはじめからは、男女ともに若い世代の参加者が増えていきます。参加者の活動内容や受講動機は様々ですが、今からの自分に役立つ具体的な理論や手法を必死に習得しようとしている若い世代の女性たちを見て、性別に関係なく、社会における実践力が問われる時代になったのを実感しています。

私は、80年代は女性が殻の中から勢いよく飛び出し、多様な生き方を模索してきた時代。90年代は女性たちが様々な分野に進出し、これからの社会に女性の力が絶対に必要だと位置づけられた時代。2000年

代は、これからの社会を生き抜く力を蓄えてきた時代だと感じています。

●地域の活性化と女性の力

東日本大震災以降、地域の絆がクローズアップされ、地域力は復興へのキーワードのひとつになっています。壊滅的な被害を受けた被災地で、復興に向け一生懸命に活動し続ける地元住民の中に女性の姿が数多く見受けられます。これまで多くの場面で女性と子ども、高齢者は社会的弱者とされ



ることが多かったのですが、性別や年齢に関係なく、復興作業に必死に取り組んでいる若者男女の姿を見るたびに、これこそが地域力であり生き抜く力であると感じています。

状況は異なりますが、今私が注目しているのは、「人との繋がりが無い」「活気がない」「若手がい無い」「働く場がない」など、ないないづくしの地域社会で、自分スタイルで力を発揮している女性たちです。

当初から地元の特産物などを活かした地域おこしなどを目標に掲げている女性もいれば、文化や芸術をとおして自分自身の夢や理想の実現を目指している女性など、行動内容は多種多様ですが、いずれにせよ彼女たちは地域活性化の重要な一役を担っているのです。

地域で新しいことを始める際には、古くからその地域に住んでいる地域住民からの風当たりや年齢・性別による偏見など、どの地域でも共通する問題が多々ありますが、本人の情熱や地域への思いが活動へのエネルギーとなり、数々の困難を乗り越えているのです。

周りの環境に上手く順応しながら自分の意志やスタイルを貫き、生き抜く力を蓄えてきた女性たちは、これからの地域社会において大変貴重な存在となるに違いありません。

地域を活性化させるためには、活性化させなければならぬ理由を住民自身がしっかりと理解し、性別や年齢にとらわれない人材の交流・育成を基盤に、次世代に繋げ

ることのできる地道な活動を諦めず改良を加えながら継続することが必要だと考えています。

どの地域にも、これからの社会を生き抜く力を蓄えてきた女性はたくさんいます。

一人ひとりの力は小さくても、結束すればやがて大きな地域力となる。その一役を担っている女性たちの今後の活躍を心から期待しています。

